

令和元年6月25日現在

機関番号：14401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13547

研究課題名(和文)教育機関・プログラムと連携した地域家庭への留学生受入れ；ホームステイの研究

研究課題名(英文) A Study on Home stay; Admitting International Students to local families in cooperation with Academic Institutions and Programs

研究代表者

近藤 佐知彦 (Kondo, Sachihiko)

大阪大学・国際教育交流センター・教授

研究者番号：70335397

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：留学生の宿舎には様々なオプションがあるが、中でも「教育効果」について期待が高いホームステイについて、本研究では成績を指標として効果検証を行った。素材としたのは初学者向け日本語サマープログラムである。結果として教育促進効果が顕著な成績の差として現れることはなかったが、異文化についてより深い理解を求める学生がホームステイを選択する傾向が確認された。また実際にホームステイを経てより深い日本文化や日本人の実生活への興味を深化させる傾向が示された。今後はホストファミリーの異文化促進を含めた複合的な視点が必要であると考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

異文化イマージョン環境によって言語学習習得などが促進されるのではないかと一般に期待されているホームステイであるが、先行研究では必ずしも習を統制できる環境とは言えないなかで、明確な「教科教育効果」特に「言語習得の伸び」については、個人差が大きく、明確なアドバンテージを見出すことは出来なかった。同時にその教育効果については、先行研究等が示唆するように、ホストファミリーを含めたゲスト・ホスト双方の異文化理解促進などについて今後の研究の焦点を広げる必要がある。

研究成果の概要(英文)：In this study, highly expected positive effects of homestay accommodation is examined, from the view point of the learning outcomes. The research was conducted based upon the summer intensive Japanese program. As a result, significant homestay advantage on learning outcome was not confirmed, but those who seek deep understanding on host culture tend to choose homestays. Also they in fact acquired deep understanding on Japanese culture and real Japanese everyday lives. We, therefore, need more comprehensive approach to the homestays, including the multicultural understandings of host families, for further researches on this topic.

研究分野：留学生教育 社会心理学

キーワード：ホームステイ 留学生宿舎 留学生教育

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究の背景には「自学のサマースクール参加学生にはホームステイが出来るよう手配して欲しい」という合衆国の協定校からの強い意向がある。そのため地域一般住宅に留学生を寄宿させるタイプの宿舎開拓が目が向いた。協定校では「Homestay Advantage」を期待しているという。彼らが想定するホームステイの利点とは、言語習得の加速や異文化理解の促進などではないか、と漠然と想像は出来る。ただしそれを具体的に検証ができるものなのだろうか。様々な留学生宿舎の開発に携わってきたが、合衆国の大学などが受入校に期待する Homestay Advantage の正体をあきらかにする必要性を感じていた。

また研究当初 2015 年頃以降には、訪日客の爆発的な増加に伴って宿泊業の免許を要しない「民泊」に関する論議が盛んになりつつある時期であった。そのなかの一類型として「ホームステイ型民泊」という宿泊カテゴリーも耳にするようになっていた。これも語感としては漠然と理解できるが、大学生の学習に Homestay Advantage が期待されるようなホームステイと「家主在宅型民泊」「営利的な一般住宅宿泊事業」とを同じカテゴリーで括るのも乱暴だと考えられる。研究教育機関や教育プログラムと連携した(いわゆる民泊とは一線を画する)ホームステイのあり方について、観点を整理しつつ、特に大学レベルの留学生に対して期待しうる Homestay Advantage について検証を行う必要を感じていた。

2. 研究の目的

既述のようなポイントを含め Homestay Advantage について先行研究を整理し、それに基づいてより深く探求解析することを 3 年間の研究目標とした。またその延長上には「日本の研究機関などと連携したホームステイのあり方」について、その質を担保しより普及させるために、一定の運営指針を得ることが期待されている。

3. 研究の方法

先行研究の整理

主としてアメリカ及び日本において行われた先行研究について整理し、また同時に概念としての「ホームステイ」の整理を行った。この際には「ホームステイの起源」について、山口隆子大阪観光大学教授の未刊行論文(山口 2012)を参考とさせていただき、また教授ご本人から興味深いご助言を頂いている。

大学等アンケート

JAFSA および留学生教育学会などの ML 媒体を通じて全国の国公私立大に呼びかけ、ホーム推定に関する意識調査を実施している。質問項目総数 73。アンケート実施時期は 2017 年 5 月から 7 月にかけての 2 ヶ月間を設定した。

夏期サマープログラム参加者アンケートおよび成績関連分析

研究代表者が勤務校で夏期に運営し、分担者がアカデミックコンテンツを監修する初学者大將夏期 8 週間 90 コマの集中日本語コースを履修する留学生について、学生の希望に応じてキャンパス近辺の学生単身アパートもしくはホームステイを割り当てている。アパートは徒歩圏内で自炊あるいは外食であるが、ホームステイでは 3 万円ほどの割増料金を払って、通学一時間圏内で二食付きという設定である。ホームステイには交通費も余分にかかる場合が多い。多少のコンディションの差があるものいずれも単身居室を割り当てられている。もちろんいずれの宿舎を選択した場合でも同一の教育課程を履修するわけで「宿舎による学習効果の差」が現れるとすれば、比較的検証しやすい状況にある。

まず全学生を対象に「宿舎に期待すること」「プログラムに期待すること」を渡日当初のアンケートで問い、プログラム終了時にも「宿舎で得たこと」「プログラムで得たこと」等の意見を徴した。そのアンケート結果について、単身アパート・ホームステイを選択した学生の間で統計的手法を用いつつ比較照合することで、プログラム開始当初の Homestay Advantage に関する外国人学生の期待を分析した。また事後のアンケート分析を基として、実際にその期待値が満たされたのかどうかについて判定を行う事にした。それに加え、各学生の成績についてホームステイ学生と単身アパート学生間で比較をおこない、教育のアウトカムについて宿舎の選択が影響するか断定できるような証拠が挙げられるかどうかについて検証を試みた。

4. 研究成果

先行研究の整理

主として第二言語学習の分野での研究を俯瞰すると、ホームステイによる第二言語習得に向けての顕著な効果(アメリカ人のロシア語学習)は見られない、とする Rivers(1998)の研究と、ホームステイ学生の方が言語学習に関する成績が有為に高かった、とする鹿浦(2007)の分析(短期プログラムに参加する外国人学生の日本語学習成績)など、相反する様々なデータ集積や解釈が見られ、未だ確定的な結論は出していない。一方、異文化理解の側面からはホームステ

イによるポジティブな影響がみられるということでおおむね一致している (Cook, 2006 ; Di Silvio and Malone 2014)。後述するが、本研究においては、プログラム修了後の成績については異なった宿舎間で顕著な成績の格差は見られず、結論を急ぐことは出来ないものの、鹿浦より Rivers の見解を支持する結果となった。

なお、山口 (2008, 2012) も指摘するように、先行研究を俯瞰する時、第二言語習得研究の研究者のなかでも特に異文化間教育を専攻する研究者がホームステイ研究に関心を持つ傾向がある。その反映として「異文化間接触はポジティブな教育的効果を生む」そしてひいては「ホームステイは良いこと」という結論が最初から設定されているかのような研究が目立つ。このように、異文化間接触による教育効果を重要視する前提から出発する研究が多いのではないかと、というポイントは留意する必要がある。研究に取りかかる前に、結果が先にありき、という姿勢は戒めねばなるまい。

大学等アンケート

2017 年に行ったオンラインサーベイでは 63 校からの回答を得ている。その結果、大学側は「ホームステイによる教育効果を期待して」ホームステイを組み込んだ教育プログラムがあるから」という理由が「留学生宿舎が逼迫している」というような理由づけを圧している。また受け入れ家庭の動機としては「国際貢献」「家族の国際理解」「語学の相手」「子供の教育のため」が「収入源 (セカンドビジネス) として」より強い、と大学は理解していることが判った。つまり教育機関 (教育プログラム) が期待する Homestay Advantage の中には、第二言語学習者の学習効果とともに、ホストの異文化理解促進が含まれていることが明らかになった。

その一方、本当にそのような利点があるのだろうか。

受け入れ家庭の動機としてあげられた項目は、いずれも Iino (2006) などによって「一挙両得性 two-way enrichment」としてあげられた項目であり、異文化理解などについてはゲストの学生だけでなくホストファミリーにも利益が得られる、ということである。またホストファミリー自体もその期待の下に、学生等の受け入れていることが窺われる。なお、本研究ではホストファミリー等へのアンケートデータについて、ホストファミリー事業者関係者の協力も得て集めているが、残念ながら分析が追いついておらず、キチンとした結果としては提示できない。

夏期サマープログラム参加者アンケートおよび成績関連分析

	ホームステイ選択者			その他			分散分析表 (抜粋)		
	平均値	度数	標準偏差	平均値	度数	標準偏差	自由度	F値	有意性
費用	0.231	26	0.7104	1.367	49	1.9224	1	8.431	***
広さ・間取り	0.269	26	0.9616	1.429	49	1.8143	1	9.202	***
プライバシー	0.423	26	1.1375	1.898	49	2.1335	1	10.75	***
個人専用水回り設備の必要	0.154	26	0.7845	0.816	49	1.4955	1	4.434	**
ネット環境	0.539	26	1.2404	1.408	49	1.7902	1	4.877	**
食事	1.577	26	1.5537	0.51	49	1.0433	1	12.53	***
大家との交流	0.269	26	0.9616	0.122	49	0.5997	1	0.662	
地域住民との交流	3.731	26	1.8013	0.408	49	0.9772	1	107.8	***
地元学生との交流	1.115	26	1.5831	0.959	49	1.3838	1	0.196	
プログラム参加学生同士の交流	0.154	26	0.5435	0.837	49	1.3439	1	6.147	**
立地・通学距離	0.885	26	1.5576	2.163	49	1.8183	1	9.243	***
立地・キャンパス以外との距離	0.615	26	1.0983	0.612	49	1.2044	1	0	
安全	0.231	26	0.6516	0.388	49	0.975	1	0.543	
家族的な雰囲気	1.692	26	1.7151	0.204	49	0.8655	1	25.08	***
言語学習	2.308	26	1.4905	0.939	49	1.6759	1	12.21	***
学修に集中できる環境	0.192	26	0.801	0.612	49	1.32	1	2.194	

*:p<0.05, **:p<0.01, ***:p<0.001

いくつかの分析結果があげられた中でも (近藤 2017)、上記の「プログラム当初のアンケート」の結果を点検すると、ホームステイ選択学生が重視したポイントは「食事」「地域住民との交流」「家族的な雰囲気」「言語学習」が宿舎を選ぶ際の決め手である。言語学習が進むのではないかと、という期待とともに、家庭的な雰囲気、食事などホームステイによって提供される生

活レベルでの異文化接触に期待値が高い。一方、単身アパート選択学生は「費用」「広さ・間取り」「プライバシー」「立地・通学距離」「個人専用水回り設備の必要」「ネット環境」「プログラム参加学生同士の交流」を重視していた。同年代の学生（外国人同士）とのつながりや、プライバシー、経済性が重点ポイントである。二つのカテゴリーの学生を考えた場合、現代の外国人学生にとって若干の追加支出をしても手に入れたと考える Homestay Advantage とは「食事」「地域住民との交流」「家族的な雰囲気」「言語学習」ということになる。特にホームステイ選択者は「日本人の生活を知る」ことに対して関心が高い。

一方、プログラム参加後のアンケートを点検すると、宿舎間で有意な差を得た特徴的な項目はホームステイ選択者が「様々な年代の日本人と知り合えた」と考えている、ということである。なお、質問紙設計の際には「日本のテレビを見た」といった項目を含めており、これはホストとゲストがリビングで一緒にテレビを見るような場面を想定してのものだった。しかし回答を点検する限り、学生がホストファミリーと共にテレビ鑑賞をする、といった経験はかなり希少だったように思われる。ホームステイ学生にしても、その多くは食事が終わると「個室に引っ込む」というような生活スタイルであることが推測され、宿舎に戻ってホストファミリーとどの程度交流するのか、といった計測しがたい側面が多数ある。このあたりについては仮に分析を精緻化しようとするれば、エスノグラフィ的なアプローチを含んだ観察が必要になる。またはより精緻なログがとれる e-learning などと組み合わせた研究が必要となるだろう。

なお、成績に関しては若干の差が見られたものの、鹿浦（2008）が主張したように「ホームステイする学生の成績がいい」とまでは言い切れない。本研究では学習に費やした時間や日本人との接触等、留学先での学習生活両面についてすべての行動ログをとると言った統制は出来ておらず、今後より精緻なデータをとるためには、次項で述べるような新たな研究デザインが必要になることが判ってきた。

本研究の結論としては、成績など目に見える学習成果として Homestay Advantage を確認することは出来なかったものの、ホームステイをする学生は、学生アパートを選択する若者に比べ、草の根の異文化理解に対して前向きな姿勢を示していることが確認でき、また幅広い年代の日本人との交流を志向し、また実践していることも明らかにすることが出来た。従って、本研究で集められた知見からは、Homestay Advantage とは第二言語習得などに直接的なメリットをもたらすと言うよりも；

- (1) 外国人ゲストの異文化理解
- (2) 日本人ホストの異文化理解

...というような、文化面での双方向交流活発化に役立つという意義が確認された。

残された課題と次なる研究へのデザイン

異文化イメージ環境が第二言語学習の促進として役に立つのか、というポイントについて、同一プログラムに参加しつつも異なった宿舎を選ぶ学生の間で「差が出るのか」という視点から検討しようとしたのが本研究である。しかし「成績」という計量化された物指しを使っただけでは、その実証までには至らなかった。当然のことながら成績の向上は学習時間や学習態度、その他の要素が絡んでいるはずであり、宿舎選択がその要因たりうるかどうかについて、一定の手応えはあったものの、実証には至らなかった、というべきだろう。

今後の研究の精緻化に向けてはいくつかの方向性が考えられるが、異なった宿舎間で以下の変数についてチェックをしていく事が考えられる；

- (1) 来日当初の日本語力の測定とその後の「伸び」の可視化
- (2) ホームワークのオンライン化などによる学習のログ記録
- (3) ホームステイ学生の学習態度などに対するホストからのレポート

経験的には、ホームステイ学生の方が比較的生活リズムが整っており、通学時間がかかるにもかかわらず遅刻等が少ない、などの声は教職員から聞かれる。また規則正しい生活のせいか健康管理も出来ている。その一方で「ホームステイ学生が夜遊びをして帰ってこない」といったホストファミリーからの苦情を受けることも経験してきた。一概に計量化しにくいところではあるが、ICTの活用により(2)のような措置をとることが出来れば、教室外の学習もより統制のとれた教育運営と学習量計測・計量化が可能となる。ただし、ホームワークも含めた学習全体を ICT 化する、という方向性は人と人の接触を重視するホームステイの理念とは反するかもしれないため、本研究にとってはジレンマを感じるころではある。

(3)については、これまで異文化理解の文脈で多用された手法であるが、Iino（2006）が「一挙両得性 two-way enrichment」としてホストファミリーの異文化理解促進について論じているところでもあり、今後はホームステイ研究の大きな柱にすることも考えるべきだろう。同時に計量化しにくい分野でもあり、ICT 等での緻密な計測に馴染みにくいところでもある。このあたりの研究は参与観察なども含めたやや大がかりな研究体制の構築が必要になる。

なお、本研究期間中の 2018 年夏季は、大阪北部地震や西日本を中心に被害が出た平成 30 年 7 月豪雨などの影響を受け、プログラム運営がかなりの混乱に陥っていた。そのような中でとったデータについてはかなりの欠落などがあり、引き続いてその調整を試みている。また J-ShIP の夏プログラムは全くの初学者対象であるため、本研究では学習の「伸び」は単純に成績の差異で測れると考えていた。加えて本学では中級者対象の冬の 4 週間プログラムも開催しており、夏と同様のデータを蓄積したところである。中級の学習者が宿舎の違いによってどの

程度学習成果に差がついたか、という件については引き続いて検討を加え(つまり上記(1)の問題意識) 引き続いて Homestay Advantage を明らかにする試みを続けていく。

- Cook, Minegishi, H. (2006) 'Joint Construction of Folk Beliefs by JFL Learners and Japanese Host Families' in M.A.Dufon and E.Chrchill (eds.) "Language Learners in Study Abroad Contexts." pp120-150 Multilingual Matters; Toronto
- Di Silvio, Francesca, Donovan, Anne and Malone, Margaret E(2014) The Effect of Study Abroad Homestay Placements: Participant Perspectives and Oral Proficiency Gains ' " Foreign Language Annals, " 47(1), pp.168-188. "
- Iino, Masakazu (2006) 'Norms of Interaction in a Japanese Homestay Setting: Toward a Two-Way Flow of Linguistic and Cultural Resources' in M.A.Dufon and E.Chrchill (eds.) "Language Learners in Study Abroad Contexts" pp151-174 Multilingual Matters; Toronto
- Rivers, W. I.(1998). 'Is being there enough? The effects of homestay placements on language gain during study abroad.' "Foreign Language Annals" 31 (4), pp492-500.
- 近藤佐知彦 (2017) 「現代のホームステイのあり方に関する一考察；宿舎は留学生の学習・異文化理解を担えるか」ウェブマガジン『留学交流』2017年9月号 pp12-32
- 鹿浦佳子 (2007) 「ホームステイにおける日本語学習の効用 - ホームステイ、留学生、日本語教員の視点から - 」『関西外国語大学留学生別科 日本語教育論集』第17号 pp.62-112
- 鹿浦佳子 (2008) 「ホームステイする学生は成績がいい！ホームステイをすると成績が上がる？」『関西外国語大学留学生別科 日本語教育論集』第18号 pp99-134
- 山口隆子 (2008) 「ホームステイ」誕生の背景と求められた異文化理解 - 世界で最初のホームステイ組織・EIL を事例に - 」『神戸文化人類学研究』第2号 pp.30-69.神戸大学大学院国際文化学術研究科文化人類学コース
- 山口隆子 (2012) ホームステイの人類学的研究 - ホームステイ組織 The Experiment in International Living の形成と展開 - 博士学位論文 (神戸大学)

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

1. 近藤佐知彦 (2017) 「現代のホームステイのあり方に関する一考察；宿舎は留学生の学習・異文化理解を担えるか」ウェブマガジン『留学交流』2017年9月号 pp12-32 査読なし

〔学会発表〕(計3件)

1. 中野遼子 (2018) 「ホームステイと日本語学習効果に関する考察：大阪大学の日本語集中プログラム J-ShIP の参加学生を中心に」カナダ日本語教育振興会 CAJLE 2018 年次総会 カナダオンタリオ州ロンドン市 ヒューロン大学 (8月22日)
学会メンバーシップ等の関係で研究代表者が発表に名を連ねていないが、チーム外の研究者にデータを提供し、科研のクレジットをつけて国際会議において発表。
2. Kumai, T. and Kondo, S. (2018). *A Study on Contemporary-Style Homestay; Learning Outcomes and Inter-cultural Understandings*. National Association of Foreign Student Advisors (NAFSA 2018 Annual Conference) Philadelphia (5月30日)
3. 熊井知美・近藤佐知彦 (2016) 「学習がはかどる留学生宿舎としてのホームステイの分析」第4回グローバル人材育成教育学会全国大会 大阪大学銀杏会館(12月11日)
4. 熊井知美・近藤佐知彦・熊谷圭司 (2016) 「学習がはかどる留学生宿舎としてのホームステイの機能分析」第21回留学生教育学会年次大会 大阪大学中之島センター(8月27日)

〔図書〕該当なし

〔産業財産権〕該当なし

〔その他〕

ホームページ等 該当なし

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：西口光一

ローマ字氏名： Nishiguchi Koichi

所属研究機関名： 大阪大学

部局名： 国際教育交流センター

職名： 教授

研究者番号(8桁)： 50263330

(2)研究協力者

研究協力者氏名： 熊井知美

ローマ字氏名： Kumai Tomomi

研究協力者氏名： 熊谷圭司

ローマ字氏名： Kumagai Keiji

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。